

国民の世論と運動で、「社会保障・税一体改革」をやめさせ、社会保障拡充への転換を！

ほっかいどうの社会保障

2021年10月6日 北海道社会保障推進協議会 Tel:011-758-2648 FAX:758-4666

「受診をためらわせない社会に」変えましょう！
普通にくらせる収入保障とお金の心配なく医療を受けられる制度を

「お金がたまってからこようと思っていたの」 新聞の読者欄

勤医協札幌病院の看護師の「受診をためらわせない社会に」という投稿が新聞の読者欄に掲載されました。「10年前、60代後半の女性が、経済的理由で、受診をがまんし、病院に訪れた時には、がんの末期状態で、自宅でなくなったことを、選挙の度に思い出す」という内容でした。

その女性は、がん治療はお金がかかるイメージがあり、「娘2人に心配をかけたくない」と、わずかな年金をこつこつためて、意を決して来院したそうです。看護師は「一人暮らしの彼女がどんな思い悩んだか、考えただけでも胸が張り裂けそうになった」と当時を振り返ります。がんは、手術ができないほど進行し、抗がん剤は「高額だから」と拒否し、痛み止めの内服だけで生活していたそうです。

最後に「福祉を充実させ、何の心配なく通院できる安心して暮らせるための政策を真剣に考えてくれる候補者はいないかと、新聞記事に目を通して」と結んでいます。



100万円貯まるまでは、不安で受診できなかった。疼痛に耐えて新聞配達

これは、特別なことではありません。同時期、勤医協札幌病院に、「私はがんだと思います」と、乳がんの痛みを耐え、新聞配達で治療費100万円を貯めた60代後半の女性が受診しました。「お金がないと病院に行けないと思った」と話します。

しこりを感じたのは3年前。やがて胸は大きく変形しはじめましたが、治療費が心配で病院にはいかず、貯金をはじめました。夫や離れて暮らす娘に心配かけたくないと思病気を隠し続けました。患部から出血するようになり貧血もひどく、

63キロあった体重は47キロまで落ち込みました。

「放っておいた私が悪いのだから、このまま倒れても仕方ないと考えました。なぜか『生きたい』と思いました。生き物の本能かもしれませんね」と話しました。

担当した相談室の担当者は、「医療制度の改悪で自己負担が増え続け、自己責任論の影響も受けて、お金がないからと受診をためらうケースが増え続けています。誰でも安心して受診できる医療制度への改善は急務です」と話しました。(北海道民医連新聞 2009年5月14日号より)

その後の安倍・菅政権によって、さらに、医療制度が改悪されました。お金がなくて、受診をがまんする事例が続いています。「普通にくらせる収入保障」と「お金の心配なく医療を受けられる制度」が必要です。

今年夏にも、経済的理由で、受診が遅れ、命が奪われる事例も

糖尿病で勤医協札幌病院を受診していた60代の男性は、医療費の支払いが困難で2014年以来受診を中断していました。今年の5月頃から、咳などを自覚し、摂食も困難となり札幌病院を受診しました。無料低額診療事業の相談をしようとしていたところ、その場で倒れてしまい、そのまま勤医協中央病院へ搬送されました。

がんの終末期と判明、入院してひと月ほどで亡くなりました。医療費の窓口負担がかからない、もしくは低額で受診が継続できていれば早期にがんを発見できる可能性もある事例でした。誰もが安心して病院を受診できるように社会保障を改善させることがなにより必要です。(勤医協中央病院医療福祉課の相談員より)

いのちまもる政権選択選挙

毎日が(期日前)投票日 31日が投票最終日



「市民連合と立憲野党4党の政権合意」から

- 従来の医療費削減政策を転換し、医療・公衆衛生の整備を迅速に進める。
- 最低賃金の引き上げや非正規雇用・フリーランスの処遇改善／誰もが人間らしい生活を送れるよう、住宅、教育、医療、保育、介護について公的支援を拡充し、子育て世代や若者への社会的投資の充実を図る／所得、法人、資産の税制、および社会保険料負担を見直し、消費税減税を行い、公平な税制を実現し、低所得層や中間層への再分配を強化する。